

定置網漁業後継者として10年 — 持続的な漁業経営を目指して —

内之浦漁業協同組合
柳川 拓哉

1 地域の概要

肝付町は、大隅半島の南東部に位置し、平成 17 年 7 月に内之浦町と高山町が合併してできた、豊かな自然に恵まれ農林水産業が盛んな町である（図 1）。

町の中央部には 900 メートル級の山々が連なる国見山をはじめとする肝属山系があり、町面積の 80 %以上を林野地帯が占めている。常緑広葉樹が広く残された肝属山系や高隈山系から流れ出す水は肝属川や高山川を経て、町北西部で水田・畑作地帯を形成する肝属平野を流れ、志布志湾へと注ぎ込んでいる。また、南東部の海岸線は急峻な山脈がそのまま太平洋に落ち込んでおり、豊かな海の資源をはぐくんでいる。

肝付町の南側には、内之浦宇宙空間観測所があり、ロケット発射基地の町としても有名である。

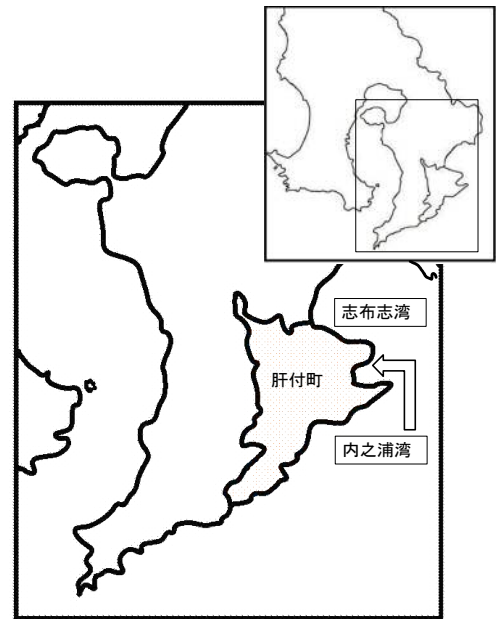


図1 肝付町の位置

2 漁業の概要

私の所属する内之浦漁協は、平成 17 年 4 月に旧内之浦町内の内之浦町漁協、船間漁協、岸良漁協が合併してできた漁協である。



図2 平成29年度内之浦漁協
水揚量 (他港含む)

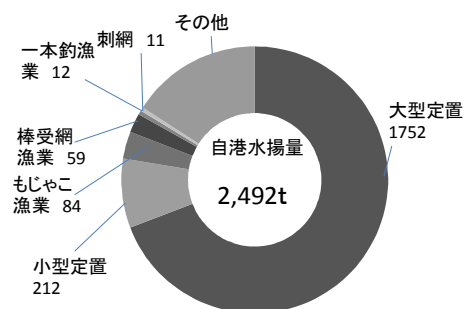


図3 平成29年度内之浦漁協
自港水揚量 (養殖と中型まき網を除く)

平成 29 年度末現在、組合員は正組合員 151 名、准組合員 9 名の合計 160 名である。

また、平成 29 年度の水揚量は約 7,700 トン、水揚金額は約 18 億 600 万円で、その主なものは中型まき網・魚類養殖・定置網である（図 2）。自港水揚量では、大型・小型

定置網の水揚量がおおよそ8割で（図3），平成29年度の定置網の水揚量は1,964トン，水揚金額は4億5千万円を超え，大型定置網は8統と，沿岸漁業では定置網漁業の比重が大きい組合である。

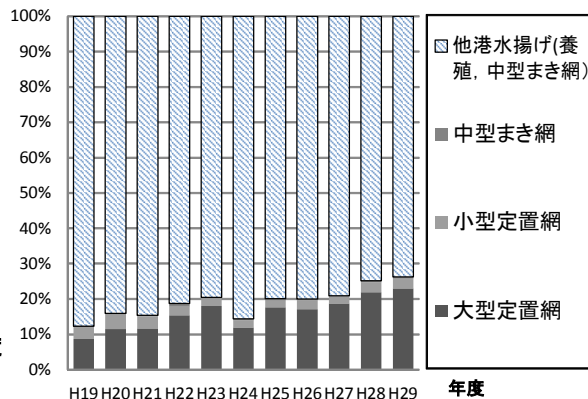
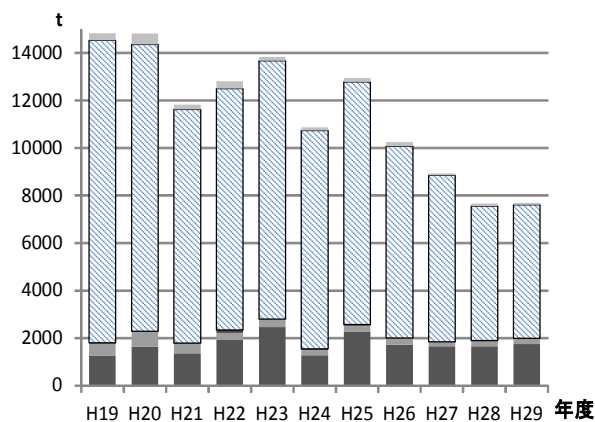


図4 内之浦漁協漁業種類別水揚量

図5 内之浦漁協漁業種類別水揚量の割合

ここ10年間の漁協の水揚量の推移を見ても，定置網の水揚げが安定しており（図4），組合全体の水揚量のうち，定置網の割合が高くなっていることが分かる（図5）。

定置網で漁獲される魚種は，アジ類，カマス類，サバ類，ブリ，タチウオなど多種にわたる。

内之浦漁協には地方水産物卸売市場があり，漁獲物は順次入札にかけられ，仲買業者により地元，県内，県外に発送される。全体の水揚量によっては，入札最後の方は単価が下がることもある。

3 研究・実践活動取組課題選定の動機

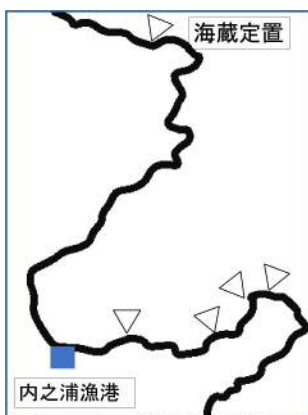


図6 内之浦漁協本所の大型定置位置図

私は，内之浦で50年ほど前から中型まき網漁業「有限会社昌徳丸」を営む家の長男として生まれ，小さい頃から祖父と釣りをするなど漁業は身近なものだった。

平成13年，まき網の経営を父に譲った祖父は，大型定置網の経営を開始した。私は地元を離れ鹿児島市の学校に通っていたが，平成15年に帰郷して，20才から祖父の定置網に乗り組むようになった。

この定置網はその地名から「海蔵定置」と呼ばれる。「海蔵定置」は，内之浦漁協本所の5統の大型定置の中で，漁港から最も遠い，内之浦湾の外にある定置網である（図6，7）。また「環巻き方式」という，箱網に付けた環（図8）に通したロープをローラーで巻いていくと，網が魚獲部まで揚げられていく方式の網を，祖父が定置を引き継ぐ以前から使っている。

これにより，通常なら乗組員が15名程度は必要な大きさの網を，自分も含めて8名の乗組員が19トンと3.6トンの2隻の漁船で揚げることができる（図9）。なお，環巻き方式は網が痛みやすいなどのデメリットもある。

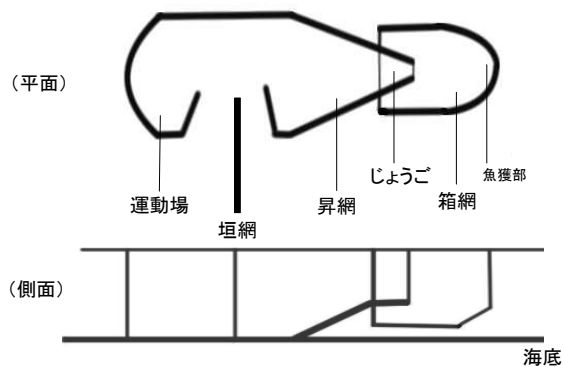


図7 定置網の模式図



図8 網の環巻き部分

私が乗組員として5年経ち漁にも慣れてきた平成20年、25才の時に祖父が急に船を下りることになり、突然、定置網の経営と漁労長を引き継ぐことになった。

初めて7人の乗組員の責任を持つことになり、自分なりのやり方でやらないといけない状況で不安はあったが、乗組員として働きながら「もっといい方法があるはずだ」と思っていたので、網の仕立てや職場の体制など、納得いかなかったところを変えていきたいという思いで、定置網の経営を始めた。



図9 使用漁船

4 研究・実践活動状況及び成果

(1) 定置網改良の実践

私が漁労長になりまず考えたことは、網の改良だった。

平成23年に水揚げがない日が続く、自分で色々考えて、箱網(図7, 10)を短くした。網の構造上、魚の滞留を考えると漁獲量を減らしてしまう可能性もあったが、これは揚網時間を短縮して作業を効率化し、水揚げ時間を早めることで、入札単価の向上を狙ったものだった。

しかし、これだけではうまくいかず、もう定置網はやめようかと数ヶ月まき網に乗り組んだりしたが、自分なりに考えを整理することにした。

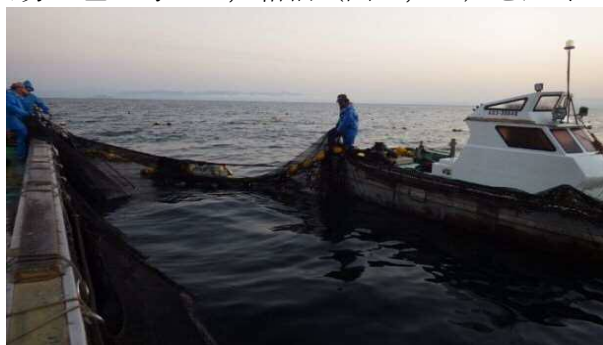


図10 箱網の揚網状況

まずは網改良の目的を整理し、優先順位を付けた。その順番は①揚網や網保守作業の効率化、②漁獲量の増加、③網の耐久性である。これらとコストのバランスを取りながら網の改良を継続するためには、自分と考え方の合う網業者の協力が必要と考え、業者を調べて探し当て、意見交換しながら網の改良を少しずつ続け、今に至っている。

平成 25 年には、「漁獲量の増加」を狙い、網成り修正として“運動場”の構造の見直しをするとともに、「耐久性」を考えて網地素材をポリエチレンからテトロンに変更し、金庫網を設置した。

さらに平成 26 年には、“じょうご”の改良に取り組んだ。それまで網揚げ前には“じょうご”の口を箱網の先から支える

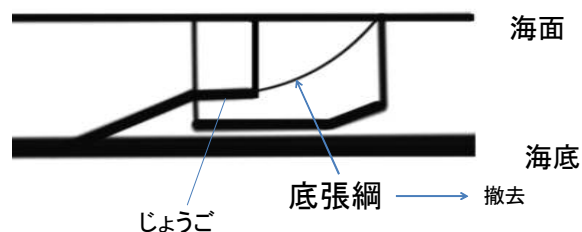


図11 底張網

底張（そこばり）の網（図 11）をほどくの約 15 分必要だったが、この作業を省略するため、“じょうご”を重くし形を整えて底張の網をなくした。また、28 年には網揚げを容易にし、網の汚れを少なくして管理もしやすいよう、“じょうご”の目合いを 12 節から 6 節と 2 倍にして、「揚網や網の保守作業の効率化」を行った。

（2）安定した雇用のために

私は漁労長になった当時から、漁業者はもっと安定して働いているイメージを持ってもらってもいいのではないかと考えていた。

以前は乗組員の作業時間は、「作業終了まで」というあいまいなところがあったが、毎日 8 時間の勤務とし、休憩を入れて夏場は 4 時から 13 時まで、冬場は 5 時から 14 時までと終了時間を決めた。海蔵定置の網は「環巻き方式」で網が痛みやすいため、網替えは 3 週間ごとと決め、網の補修を計画的に行うようにした。

そして、父の経営するまき網に習い、社会保険に加入するようにした。さらに、乗組員の技術を評価し、手当を出すなどして、仕事に張り合いがあるようにも工夫してきた。

こうして、若い人に長く働いてもらい、漁労作業、網の保守管理作業などの経験を積んで早く確実に作業を行ってもらうことが「揚網や網の保守作業の効率化」になる。「環巻き」の網は補修もやや複雑ではあるが、経験を重ね作業効率が良くなれば、網補修にかかる時間を減らすこともでき、網の使用年数をより長くできれば網購入のコストを下げることができ、経営の安定につながると考えている。

また、5～6 年前からアルバイトとして 70 才以上の方を 2 名、水揚げ時の魚選別に来てもらっている。1 名はまき網を引退した方で、もう一人は自衛隊員をしていた方である。好きな魚を扱う仕事をする事で本人たちもやりがいを感じてもらっており、会社としても助かっていて、双方に良い関係となっている。

（3）中型まき網との合併

平成 27 年に、父の経営する中型まき網「有限会社昌徳丸」と私の定置網「昌徳丸」が合併した。

これにより全体の経営は父が、会計は母と妻が行い、私は代表となり定置網部門の経営を任された。合併する以前の水揚げが不安定な頃は、まき網部門には支えとなってもらった。特に網の改良などはまき網部門の支援がなくては思った改良ができなかったと思う。

合併後は、まき網か定置網どちらかの手手が足りなくなる場合、乗組員を異動し補充

することがスムーズにできるようになった。1週間や10日間の短い期間でも、船上作業に習熟した乗組員が確保できることは、両方の部門にとって安心感につながっている。

5 波及効果

(1) 漁獲状況

平成25年の金庫網の設置により、平成26年にはメジナの豊漁があり、それ以前と比べると水揚量が増加してきた。平成29年4月には、1日1万尾を超えるブリを漁獲した。1日1万尾以上ブリを漁獲することは、内之浦では「万越し」といい、昔は踊りを披露し祝うなど大変めでたいことで、今回は31年ぶりのことだったそうだ(図12)。

こうして、平成27～29年度の水揚金額は年間5,000万円を超えるなど、近年は好漁が続いている(図13)。



図12 新聞記事

定置網への魚の入網は、魚の回遊経路による場所が大きく、これらの好漁が網の改良の結果と言い切ることは難しいが、内之浦漁協の大型定置網全体の水揚量に占める海蔵定置の水揚量の割合は、平成27年度以降上昇傾向にある。大型定置の統数が維持されている中、海蔵定置の割合が増えているということは、網の改良は効果があったのではとされている(図14)。

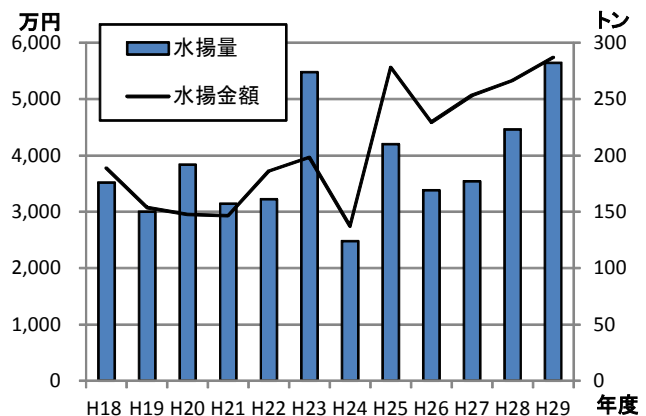


図13 海蔵定置の水揚量と水揚金額

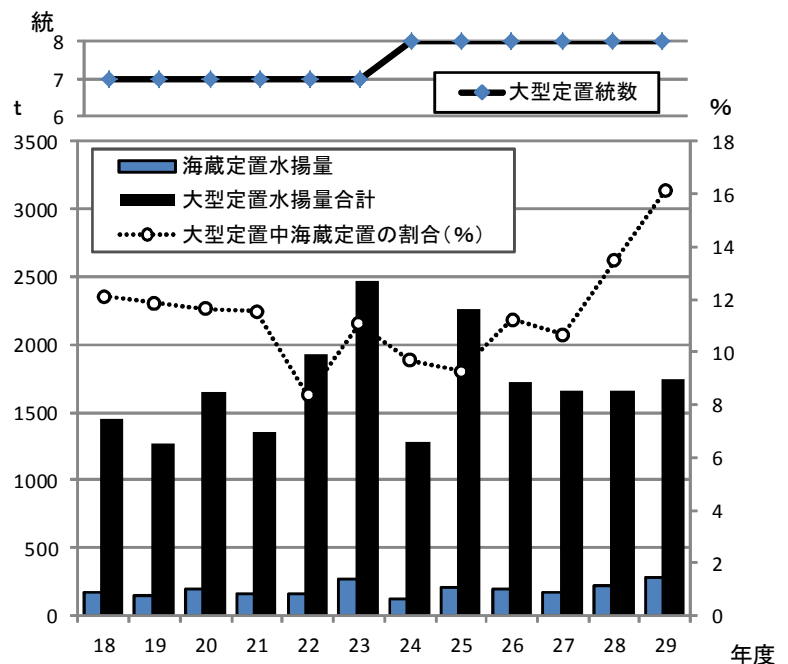


図14 大型定置網全体に占める海蔵定置水揚量の割合

(2) 雇用の状況

現在の乗組員の年齢構成は、70才代が1名、60才代が1名、40才代が1名、30才代が3名、20才代が2名で、場合によってはまき網部門と行き来しながら、働いてもらっている。これは、内之浦漁協の定置網では平均的だと思うが、県全体の漁船漁業就業者と比較すると若い(図15)。

4年ほど前に、定年退職した4名に代わり20、30才代の4名を乗組員として確保することができたが、皆技術も習得しつつあり、乗組員の定着もある程度できたのではないかと考えている。

若い乗組員が技術を習得して作業の効率化が進むとともに、網の改良による効率化を進めば、環巻き方式で乗組員が少ないこともあり、給与を上げることも可能になり、さらに乗組員に安心感をもって働いてもらうことで、安定した経営にもつながると思う。

そして、若い乗組員の定着が、地域の活性化にもつながっていくのではと考えている。

また、海蔵定置の状況を見て、他の経営体でも「環巻き方式」の導入を検討しているとの話もある。

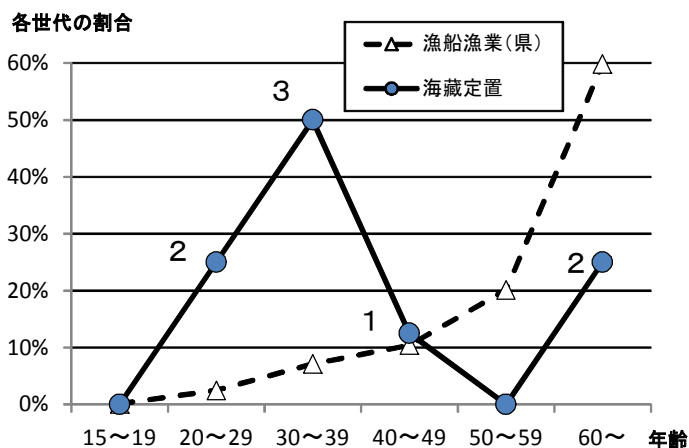


図15 海蔵定置と県漁船漁業男性
就業者数 年齢組成の比較
(数字は海蔵定置人数)

6 今後の課題や計画と問題点

定置網を任されて、網の改良や雇用の改善等、自分なりに考え10年間試行錯誤しながらやってきたが、他の定置網の先輩方と比べるとやっとスタートラインに立てたという気持ちである。

網の改良については、終わりが無いように感じているので、年間水揚げ6,000万円を目指し、コストとのバランスを考えながら計画的に網の改良を続けていきたい。

雇用の面では、まずは今の乗組員に安心して長く働いてもらいたい。さらに、これからは全国的な人口減少により人材確保は難しくなっていくだろうから、揚網や網の保守作業の効率化を進めて乗組員の負担を軽減させつつ、新たな人材確保の方法も考えなければならないと感じている。

また、魚価をより高くするため、将来は活魚出荷を行いたいという希望がある。蓄養イケスは準備しているので、これから行動に移していきたい。

最後に、漁業を始めてから15年、漁業後継者として10年になるが、父は口を挟まず私のやりたいようにさせてくれた。面と向かってあまり言わないものの、父と母には感謝している。

今後も色々な面で改良を行い、持続的な漁業経営を目指していきたい。